

北里大学教養図書館

閲覧ニュース

38号

1983. 1



「ジュリアス・シーザー」演出日記

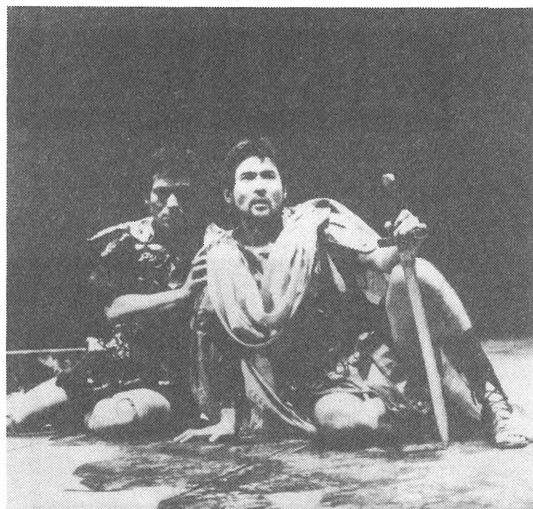
— 稽古場裏話 —

福 田 逸

承前

○月×日

血糊も用途によって色々工夫を凝らす。歌舞伎などで、切られた人の口から血がたたり、といったものの場合、何よりも食べても無害である必要がある。これに使われるのは、メリケン粉等の糊と洋紅（食紅）を溶いて和紙で包んでダンゴ状にした血玉というやつである。今回の吾々の公演では食べられる必要はない、何よりも血らしく見えること、そして（衣裳係としては）洗って落としやすいことであろうか。吾が劇団秘伝の血糊は、CNC（安物のジャム等に粘りを出すための糊）と酸性染料のスカーレットにブラウンを少々混ぜたものを水に溶かす。このブラウンを混ぜる率がミソで、血の色に似るか否かはこれ一つにかかっている。こうして溶いたものを、防水スプレーを吹きかけ浸み出しにくくした和紙に包んで糸で縛る。これを役者が体のどこかに隠し持つわけだ。前回は本番でブルータスが脛に隠しておいたものが、体温でやわらかくなり流れ出して困ったという苦い経験がある。また同じ失敗を繰返したくない。そこで今日は全体の稽古を早めに切りあげ、実際に血糊を使って抜き稽古をする。それぞれの場の前で、段取りを細かく打合せ。誰がどこに隠し、どのきっかけで誰に渡すか、渡された方はどこでそれを体につけるか、つけたあと、包んであった和紙をどう処理するか、あるいは初めから自分で隠し持っていて、何気なく取り出せるか等々。シーザー暗殺も、詩人シナ虐殺も、殺す側が隠し持った血糊を、もみ合ううちに殺され役に渡し、本人が自分で体につけることにして、一回目を試す。シーザーは首筋へのオー撃を受け、その剣を奪おうとして背中に伸した右手に血玉を受け取り、自分で首筋に塗り、そのまま肩から胸へとグロテスクな血痕をなすりつける。更に後を向



ブルータスの敗北

いた所に両側から三人の暗殺者が突進する、その一人から再び血玉を受け取り、両脇腹に血を塗り、残った和紙を三撃目の一人に渡す。最後のブルータスは刺すだけである。この後、ブルータス達はシーザーの血を両の手と腕、剣に塗り広場へ群衆を鎮めに行くが、暗殺者は七人、十四本の腕と七本の剣。かなりの量の血が必要だ。これはシーザーの幅の広いベルトの下に仕込んだチューブに血糊を詰め、倒れたシーザーの腹を押すようにして出す——一撃目は成功。二撃目がもつれて上手く両脇に塗れない、和紙も渡し損なって落してしまう。チューブはよいのだが、ベルトの形がくずれる。血糊の濃さは大体よい。一番の問題は激しくもみ合う中で、シーザーが上手く血を塗れないということだ、シーザーに関しては明日から色々段取りを変えて何度も稽古することにし、詩人シナ虐殺の稽古に移る。

段取りとしてはシーザーより簡単で、散々殴る蹴るの乱暴を働いた民衆の最後の一撃で、シナが頭に裂傷を負い額から血が滴るという想定である。ただ問題は殴られ蹴られしている間、シナ自身が血玉を持ったら、投げ飛ばされた時に上手く転がることも出来ない。従って脳天への一撃の寸前に誰かから血玉を受け取るわけで、これも殺

陣の中で一瞬のうちにやっしまわなくてはならない。が、これは比較的上手く処理出来た。一回目。受け取った血玉を観客に背を向けている間に額につけ、悲鳴を挙げつつ前に向き直る。手を離すと額がベツトリと真赤になってはいる。如何にも、血糊でござい、といった感じで、見物していた他の役者やスタッフは失望の声を挙げる。段取りに関しては何の問題もない。問題なのは血糊の濃さだ。早速、血糊の係にダメを出し、大至急二回目的の血糊を心もち薄めるよう指示する。血糊の準備をする間、シナ役のMは顔の血を落して待つ。二回目。段取り通りに進み、シナが後ろを向きくずおれる。額を押さえたままゆっくり前に向き直り、徐々に上体を起す。上体を起すに従って顔が上向く、すると額を押えた指の間から手の甲に向って見事に二筋、さらに手を離すと目頭から鼻の脇とこめかみから頬へとやはり二筋の血が流れる。稽古場がシーンと静まりかえり、皆、息を殺して見守る。ぞっとするような効果だ。一瞬総毛立つ思いで、息を呑む。シナが仰向けに倒れると、頬の血は耳の方へ流れる。次の瞬間、稽古場の中は割れんばかりの喝采の渦だった。ただし、これと同じ効果を本番の舞台で出せたとしても、それほどほどの衝撃ではあるまい。狭い稽古場での密度は、広い劇場に行くと、必ず拡散する。この血の生々しさもそれで薄められて丁度良くなるくらいかもしれない。もっとも、薄められるのは、血の効果に限らず、科白、動き、全てが劇場に移ると薄味になってしまう。血の生々しさは少し減じてよいが、科白がだらしなくなるとは困る。稽古場と舞台と、その違いも常に念頭に入れておかなくてはなるまい。血糊に関しては、本番までの間にさらに実験と稽古を重ねることになる。

○月×日

全体の流れやリズムも大体安定し、あとは細かな点のダメ出しだけといった状態になる。しかし、ここ数日、出演者の何人かがテレビの仕事で稽古に出られず、出演者の揃っている場だけを抜いて稽古する。これが続くと演出する側にも全体のリ

ズムが解らなくなって来る。マネージ部（マスコミの仕事を取って来るパート）と喧嘩ばかりしている。これは稽古の度にぶつかる難問である。役者のマスコミ収入によって公演し劇団を支えている限り仕方ないことか。芝居だけで劇団経営を成り立たせるためには、恐らく入場料を1万円以上にしなくては駄目であろう。現在のような手弁当の無料奉仕、自腹を切ったの公演形態がいつまで続くのか、根本的に考え直さなくてはなるまい。

○月×日

後半の通し稽古。戦闘シーンになると、演出席は緊張する。いつ剣が壊れたり、汗で滑って飛んで来るか解らない。隣席で、役者へのダメをメモしてくれるM嬢などはこのシーンになると、1mほどテーブルごと後へ下がってしまう。私は殺陣の振りつけを一通り呑み込んでいるので、どこで注意していればいいのかも見当がつく。オー演出家が逃げ腰では、稽古が出来ない。（実のところ甚だ怖いのだが、それを顔に出すわけにも行かない。）昨日までは昨年も含め、本番、稽古どちらも危険はなかった。ところが、今日初めて剣の刃が柄からすっぽ抜けて飛んだ。舞台の左右からアントニー、ブルータス両軍がぶつかるところで、飛んだ剣は相手側に向ってすっ飛んだのだが、相当の人数が舞台上にいるにも拘らず誰にも当たらずに済んだ。奇跡と言いたいくらい。原因を調べると、何のことはない、戦闘用の剣には特別の補強をしておくことになっていたのだが、それをしていない剣があったのだ。一瞬かっとして小道具の担当者を怒鳴ろうとしたが、黙ってしまった。相手は自分の失敗に悄気かえつて、私以上に青ざめた顔をしており、こちらが気の毒になるくらいだった。だが失敗は失敗、二度とあってはならない。もし本番の舞台だったら……飛んだ方角が客席だったら……考えただけでも冷汗が出る。早速、剣全ての再点検、再補強を指示。さらに本番前にも再々補強を厳命し、客席の方には飛ばぬよう、振り付けも再点検することにした。

で、次の戦闘シーンに移る。悪いことは続くも



シーザーの暗殺

のだ。ブルータスの身代りになって三人の兵と戦う、ルーシリアス役の俳優が足を滑らせ転倒、剣が手を放れ、日頃のダメの仕返しかと思う程、見事に演出席目がけて飛んで来た。が、これも、幸い転倒寸前に手から離れたためか、吾々スタッフの2 m程前で床に落ち、後は床を滑って演出席の机の足にぶつかって止まる。隣のM嬢は悲鳴をあげる。どうも私は鈍感らしい、いざとなると不思議に恐怖を感じなかった。誰よりも驚いているのは、剣を持っていた役者達らしい。二人とも蒼白な顔をしていた。

観客はもちろん、役者に怪我をさせるわけにはいかない。といって歌舞伎のように様式化した振り付けをするわけにもいかない。安全な戦闘など、いわば言語矛盾と言ってもいい。今後も本番まで毎日のように稽古を重ねなくてはなるまい。

〇月×日

血糊がどうしても今一つ満足出来ない。シーザー暗殺に関しては、どうやらシーザーが自分をつけることに無理があると思われるので、全て暗

殺者側がつけることにして段取りを変えて稽古する。今度は一度で上手く行く。この場はこれで稽古を重ねれば大丈夫であろう。詩人シナ暗殺に関しては、大体問題ないのだが、額にベツトリと着くのが、どうも気になるので、脳天の髪の毛を押えてそこで血玉をつぶしてみる。すると、指の間からも適度に流れ出し、なお髪の毛が吸い取った血が少しづつ流れ出し、ベツトリという感じがなくなり、これもやっと満足できるものになった。

戦闘シーンは稽古の終わったあと、毎日その場だけ特別に稽古をする。役者の都合で間が二日あくと危くなる。更に馴れる必要がある。

〇月×日

アントニー演説の場の市民だが、昨年は男性が十人余り、女性は色々の都合で二人しか出さなかった。これでは余りに女性が少ないので今回は女性を五人に増やした。(本当は群衆を全部で三十人くらいにしたいのだが、出演料の問題があり、製作担当から今の人数に抑えられたのだ。)

ところが女性を増やしてみて、妙な事に気附い

た。市民達はアントニーに煽動され暴動に走るわけだが、煽られ興奮して来る場面で、どうしても昨年のような緊迫感、狂暴さが出て来ない。舞台のどこかに隙間風が吹いている。初めのうちは、人数が多いため、纏まりが悪かったり、誰かがテレビの仕事で休んでいたり、そんなことが原因で、上手く出来ないのだと思っていた。ところが幾ら稽古を重ねても、また、全員揃った時でも、どこか、ぬるい。で、ふと思ったわけだが、これは女性が原因ではなかろうか。「乱を起せ！」とか「腰掛けだろうが窓だろうが、片端から毀してしまえ。」とか（喋るのは男の役者だが）、こんな科白に相応しい雰囲気と女性とは合わないのではないか？そう思ってその場を見ていると、シーザーへの悲しみや暗殺者への怒りを表現しようとする時、大体において男優は感情を表に出そうとしているのに対し、女優は感情を自分の内に向けてしまうようだ。このことを市民役のF君に話すと、こういう答が返って来た、「そうなんですよ、〈乱を起せ〉といわれて、それをオウム返しに目の前にいる市民に向って〈乱を起すんだ〉と怒鳴ろうと思っても、相手が女性だと何だか気が抜けてしまう」。やはり、そうなのか。原因は女性にあるのか。いや、まだ結論を出すのは早い。稽古を重ねて、どうしても上手く行かぬ時、もう一度考えてみよう。何年か後にまた改めてこの芝居を演出することがあれば、その時は男性だけでやってみるか。

そういえば、この稽古に関係なくいづれ調べてみなくてはならぬことがある。シェイクスピアの時代、彼等はこの場をどう演じたのか、である。いうまでもなく、当時のイギリスの舞台には（日本の歌舞伎のように）女優はいなかった。従って、シェイクスピアの作品に書かれた女性は全て変声期前の少年が演じたわけだ。この演説の場にしても、シェイクスピアがわざわざ女性の市民に科白を言わせているとは思われない。市民1、2、3……これらは全て男の市民のつもりであろう。では、上演の時、科白のない女の市民を登場させたかどうか、これは調べてみる価値があろう。恐らく（予断に過ぎぬが）男の市民ばかりだったので

はないか。男だけでこの場の荒々しさを見事に出していたのではないか。少くとも、間違いなく断言出来ることは、たとえ女の市民を登場させたにせよ、それを演ずる役者は——声変わり前の少年といえども——男であり、男性だけの舞台に激しい暴徒の姿を描き出していたということだ。これは稽古が終ってからゆっくり調べることにしよう。いづれにせよ、昨年と今回と、二度の稽古が無かったら、恐らくは見逃してしまう問題であろう。戯曲は決して書斎の中のみで研究すべきではない。

○月×日

本番が数日後に近づく。本来なら、本番の前日、前々日に本番と同じ劇場の舞台で、衣装、道具、照明等全て本番通りに行く舞台稽古があるのだが、今回はいきなり旅に出るわけで舞台稽古が出来ない。代りに今日、稽古場で出来るだけ本番に近い形で通し稽古をする。出来はまあまあというところか。稽古不足の場が一、二箇所ある。心残りだが致し方ない。色々の制約の中で、一応のことはしたつもりである。役者、演出家、双方の能力を考えれば、これ以上を望むのは傲慢というべきであろう。

演出の仕事はあと数日の稽古で終りを告げる。が、本当の勝負は、そして役者にとって本当の試練はそこから始まる。しかも今回は、その日その日で劇場が変わる。劇場の大きさ、客層、客の人数、劇場機構の良し悪し、声の通りの良し悪し……全て違って来る。旅先の一つ一つの舞台で、それらの相違に即応しなくてはならない。そればかりか大道具の仕込み、バラシ、これらも役者がやらなくてはならない。私は全ての旅公演について行くわけには行かぬ。頑張ってくれ、そう言う以外もう何一つ手助けは出来ないのだ。（英語）

春休み中の貸出

後期試験終了後例年、長期貸出の希望がありますが、①春休み中、当館は平常開館していること、②二年次への進級では各学部分散してしまっていて図書の返却にトラブルが多いこと等の理由で長期の貸出はしておりません。平常どおりの貸出になりますので御承知下さい。

後期試験に備えて

1) 開館時間について

平日：9時から6時（1/10～2/2）

土曜：9時から1時

但し1/22（土）は3時まで開館

2) 一部図書の貸出期限変更について

試験期には、一部特定の図書に利用が集中します。このため、予約の多いものに限り、オーバーナイト貸出、三日貸出等の措置をとりますので御承知下さい。

3) その他の注意事項!!!!

★カバン・袋類は必ずロッカーに入れてから

入館すること。書架へ入る際の持込みは禁止です。

★館内での喫煙、飲食、また私語は固く禁じます。

春休み中の開館時間と閉館

1. 開館時間

平日 9時～5時、土曜日 9時～1時

2. 閉館

2月12日～14日 入試の為

3月19日 入試の為

編集後記

明けましておめでとうございます。年もあらたまり、『閲覧ニュース』も38号を迎えました。前回に引き続き、福田先生に「ジュリアス・シーザー 演出日記」の後半をお願い致しました。先生にはF. Burton『空しき王冠』（福田恒存『私の英国史』に含む）中央公論社（233/F74）、H. Burton『名優演技を語る』玉川大学出版部（小原文庫369）等の訳書があります。

表紙：一角獣と貴婦人のタピスリー（パリ、クリューニー博物館）。いずれも一角獣と貴婦人をテーマにする六帳の連作。写真はその内「昧覚」と呼ばれる作品の一部、中央に立つ貴婦人が、向って左側にひざまづく待女の捧げる高杯の果実を、右手でつまみ上げては、左手に止まる鸚鵡に食べさせている、その鸚鵡の部分である。両側に後脚で立つ獅子（左）と一角獣（右）が、長い旗竿で、三日月を三つ並べた旗を高く掲げている。もと、中仏クレーズ県のブサックの館にあったこのタピスリーを、はじめて近代社会に紹介したのは作家のジョルジュ・サンドであった。当時この館を自宅兼事務所にしていた副知事を何度か訪れる内、その美に打たれた彼女は、作品『ジャンヌ』（1844）の中でそれに触れ、次いで『リリュストラシオン』誌に精しい論文を寄せ（1847）、更に『食卓を囲って』（1862）、『ある漂泊者の戦中日記』（1871）の中に繰返し書いている。尤も、史跡監督官プロスペール・メリメが国家による買上げを進言したのは1841年でそれより早い。彼の進言は40年後に実を結び、タピスリーはクリューニー博物館に入った。リルケが『マルテの手記』の中でこの鳥を鷹と呼んでいるが、それは彼の見間違い。鷹ではなくて鸚鵡である。

閲覧ニュース38号	1983・1発行	北里大学教養図書館
発行責任者 小野健一	〒228	相模原市北里1-15-1